

授業を通してみた 芦田恵之助の教育論

— 修養論を中心に —

譯本 和子

お茶の水女子大学附属小学校

1. はじめに
授業主体としての自覚をもつことが授業の質を高めるのは万人の認めるところである。芦田恵之助(1873-1951)は授業主体としての自覚を、日本の伝統的仏教の世界に支えられた「修養論」の中核から得、日常的な授業方法の改革に終生をかけた国語教師の一人といえよう。

本研究では芦田の授業実践を分析し、そこから芦田の修養論に支えられた教育論をとらえ、その性格と機能を明らかにしたいと考える。教育思想史研究では従来授業分析により教育論を明らかにする方法が充分に行われたとは言いがたい。ここでは芦田の教育論が極めて実践的性格を強くもつ~~て~~を前提とし、授業分析による考察を試みたい。

2. 授業分析を通して見た教育論

芦田の授業記録は弟子の青山広志らの手により数多く残されている。ここでは青山編「芦田恵之助先生78才の教壇記録」1963年をもとに分析したい。これは1950年11月に長野市城山小学校で3日間に計6時間の研究授業を行った記録であるが、ほとんど3日間の全行程を同行した青山が能う限りの記録を~~と~~しているため、授業前後の消息まで視野に入れることができない貴重な記録である。この記録に表れた芦田と児童の発言を分析し、次のような教育論の特徴が明らかになった。

(1) 自力修養論に立つ「育つ者」としての自覚の強調

- (2) 体験に結合した理解の重視
- (3) 芦田の人間としての包容力
- (4) 細かい指導技術の工夫の努力
- (5) 学習者の集団思考の場としての授業という観点の欠落

3. 教育論を支える修養論の性格と機能

(1) 「主体的」生をめぐす自力修養論

近代化の矛盾を担う大正期の学校教師として、自我を持ち続け~~て~~生きぬくために、芦田は「修養」に全力を注いだ。彼は「修養」を~~生~~に結合し、それを終生続けたと考えられる。

(2) 師弟一如の問題

芦田の修養論を支える禅や岡田式靜坐法~~は~~、形の模倣から入り形を越えた自由の境地を志向する日本の伝統的な学習論が見られる。これは合理性や効率主義と対極をなす、直観的認識を重視するものである。また、ここでの師弟関係は師への全面的信頼を前提としており、集団としての同質性が求められている。

(3) 集団思考という観点の欠落

従って芦田の授業では集団や社会の観点から授業をとらえるのではなく、個人的な関係が前提となっている。

(4) 個の相違を前提とする学校へ

学校教育を万人に開かれたものにするためには、個性を重視する合理的知性の形成という本来の使命に立ち返るべきであろう。芦田は時代の制約の中で方法改革に一定の成果を挙げたが、それを今日そのまま~~に~~使えないと考える。

4. おわりに — 略